平安鎌倉時代における胎蔵儀軌の訓読について

松本光隆

はじめに

本邦の密教における胎蔵法の根本儀軌は、法全集にかかる二種の儀軌と、時代的にはそれに先立つ善無畏の手になる二種の儀軌が将来され、併せて、胎蔵四部儀軌と称さるものが存する。それぞれの儀軌は、玄法寺儀軌が円仁の、青龍寺儀軌が円仁・円珍・宗叡の将来にかかり、広大儀軌は宗叡の将来とも言われている。

胎蔵界法に関しては、本邦撰述の次第類も多く、また、真興は、「胎蔵界儀軌解釈」なる注釈書を作成しており、後世への影響は大きなものが存する。

本稿は、胎蔵四部儀軌として一括される儀軌の訓読の場における宗派による扱われ方の違いと、訓読法・訓読語の伝承の違いを論じようとするものである。

一、胎蔵儀軌の訓読の伝統と宗派

現存の胎蔵四部儀軌の平安、鎌倉時代（南北朝時代を含む）における加点資料で、管見の及んだものは以下に整理して示したごとくである。玄法寺儀軌三三資料、青龍寺儀軌一二資料、広大儀軌五資料、摂大儀軌八資料である。玄法寺儀軌は、天台宗寺門派・山門派、真言宗広沢流・小野流に互っての加点資料が存しており、玄法寺儀軌、青龍寺儀軌については、同一文献の平安鎌倉時代の加点資料の数として決して少ないものではないと判断される。

以下、まず、管見の及んだ平安鎌倉時代の加点資料について検討を加える。大毘盧遮那成仏神変加持経蓮華胎蔵悲生曼陀羅広大成就儀軌［玄法軌］二巻（法全）は、以下のものに管見が及んだ。

天台宗関係

《寺門派関係》

◎西墓点資料

1 保坂潤治氏蔵　一巻　（巻上）〈新版点本書目〉

（奥書）本云寛仁二年（一〇一八）八月廿三日以蔵本略校之御本批云龍雲坊大阿闍梨以此瑜伽傳授專寺別當上綱　行円陪座下點讀之　同聽千算供奉廿七日尋増供奉廿九日源泉阿闍梨十一月四日

長保五年（一〇〇四）十月廿六日始十一月五日朝上巻了　三井寺僧仁円記

2 石山寺校倉第九函第7号　一巻　（巻上）

○康平七年寫、朱点（仮名、西墓点、治暦二年）、墨点（仮名、平安後期）

（奥書）康平甲辰七年（一〇六四）九月二日甲子書畢

（朱書）「治暦二年（一〇六六）四月廿六日未移校時點了」

3 随心院第二函第3号　（巻下）

○平安後期寫（承暦二年頃）、朱点（仮名、西墓点、平安後期）、墨点（仮名、平安後期）

（奥書）承暦二年（一〇七八）六月廿〈以下破損〉

4 高山寺第一八二函第8号　一帖（第一）
○平安後期寫、朱点（仮名、第一群点、平安後期）、墨点（仮名、西墓点、平安後期）
（表紙）天台僧「道禪（スリケシ）」本

5 東寺観智院第二九函第1号　一帖
○平安後期寫、朱点1（仮名、西墓点、康平二年）、墨点（仮名、延久頃）、朱点2（仮名、西墓点、延久二年）
（奥書）（朱書）「康平二年（一〇五九）二月廿九日奉随別處阿闍梨奉始讀了／同年三月六日奉讀之了　但布字八印未奉讀了／廿三也　同學行者□□□　□□□」
延久二年（一〇七〇）二月廿九日奉從於實相房奉讀從布字／八印已下悲愍而救護已上已了／僧覺□（宣）持珠當心上已下八延久二年八月八日奉從別處奉讀之了」

6 石山寺校倉第九函第6号　二巻
○平安後期寫、朱点（仮名、寶幢院点、永承七年）、白点（仮名、寶幢院点、平安後期）、墨点（仮名、西墓点、久安四年）、緑青点（仮名、西墓点、院政期）
（奥書）（別筆）「久安四年（一一四八）十一月六日未時許奉随桂陽阿闍梨御房／即時奉受　心尊記之」
始從永承七年（一〇五二）六月廿八日ニ行之　供養會也十八道八其日ヨリ余佛ツク
始從永承五年（一〇五〇）五月廿五日供養會奉受
同月廿九日受之了但三日ノ間受之
永承七年（一〇五二）九月十九日（二十ミセケチ）點了
始從同年廿二日奉受之同　廿二　日受　諸尊會始也律師御房佐心より／僧慶尊之本

7 石山寺深密第一一二函第19号　一帖
○院政初期寫、朱点（仮名、西墓点、院政初期）、
奥書欠

8 東大国語研究室特23D3　二帖
○文治二年寫、朱点（仮名、西墓点、文治二年）
（奥書）［1］文治二年丙午（一一八六）卯月廿七日伽佐郡於丹州普甲寺書了／同五月廿一日三井平等院（×法輪院）流　壽（×□）光房（×御□）從　□□／御本賜交了卯月「十三四五」十六日　□（×交）了覺弁／五十一（×□□□□）
［2］（朱書）「文治二年（×法輪）卯月廿七日午時交點了／五月七八九十日三井平等院流壽光房ニテ／奉從受了覺弁五十一」
（別筆）正治二年（一二〇〇）三月廿七日請之歳次庚申始月次壬午／同卅日壽光房之随足下請之了／同下四月一日始交　同二日受了

9 東寺観智院第十九函第2号　二帖
○元亨二年寫、朱点（仮名、西墓点、元亨二年）、墨点（仮名、元亨二年）
（奥書）［1］元亨二年（一三二二）十二月十四日於円明寺之／松房奉從住心院僧正御房奉受之了／同以彼御本書寫交點了
［2］元亨三年二月十七日給彼御本書寫之了同廿五六兩／日之間奉随住心院前大僧正御房奉稟之了

◎点法未詳
10 四天王寺　一巻

（奥書）書本云元永元年（一一一八）潤九月廿九日
於三条僧房中賜御本書寫之
（朱書）「同年十月三四五日三ケ日移點已了　重交勘
了／同年同月四日壬午奉從唐房大僧都御房奉稟始
七日奉讀了／同受　醍醐坊阿闍梨　沙門勝運之記」
寛仁二年（一〇七一）八月廿三日以蔵本略校之
（朱書）「長和五年（一〇一六）十月廿六日始十一月
五日朝上卷了　三井寺僧行円記
治暦元年（一〇六五）九月廿五日壬午始之中絶十
月廿日：：奉從實相房阿闍梨奉讀了自次日以唐房
本校點了／良意記之」

玄法寺儀軌の加点資料三三資料のうち西墓点加点資料は、昭和現存天台書籍綜合目録に登載の四天王寺蔵本（資料番号10）の、点法未詳ながら奥書より寺門派系と認められる一点を含め加えると一〇資料が存する。最初に掲げた、保坂潤治氏蔵本については、筆者未調査で、詳細は不明であるが、新版点本書目の記載を信ずる限りでは寺門系資料の中で最も古い年号の奥書（但、本奥書）を有するもので、龍雲房慶祚から唐房行円、千算、尋増、源泉への伝授が確認される。なお、関係の血脈は本稿末尾に掲げた。資料番号2の石山校倉第九函第七号は、前缺の資料で、外題・尾題に「毘盧遮那経広大儀軌」とあるものであるが、善無畏のものではなく玄法寺儀軌で、康平七年、治暦二年の奥書が存する。資料番号5の東寺観智院第二九函第一号では、奥書中の別所阿闍梨が未勘であるが、延久二年の奥書の実相房は頼豪、資料番号6の石山校倉第九函第二号の久安四年の奥書中の桂陽房阿闍梨は仁尊と認められる。資料番号8の東大国語研究室蔵本、資料番号9東寺観智院蔵本では、文治、正治、元亨と鎌倉時代に訓読された証が確認される。即ち、管見の限りでは天台宗寺門派において慶祚辺りを初として鎌倉後期まで連続的に玄法寺軌の訓読の場が形成されていたものと認めることができよう。

《山門派関係》

◎第一群点資料（含、仁都波迦点）

11大東急記念文庫24－152－970一帖（巻上）

○平安中期寫、朱点（仮名、仁都波迦点、平安中期）、墨点（仮名、院政期）、奥書欠

12高山寺第一八二函第8号一帖（第一）（西墓点の項参照）

13旧恩顧堂文庫　二帖（上下）〈石塚晴通先生御教示、「国語国文」46-4門前正彦論文〉

○院政期寫、朱点（仮名、仁都波迦点、院政期）、青點（仮名、仁都波迦点、院政期）、緑点（仮名、仁都波迦点、院政期）、墨点（仮名、室町時代）

（奥書）［上］承安元年（一一七一）十月五日以桂林蔵本移點了／八校了
點本云／延久六年正月十五日於南泉房供養會／奉受了良祐云、

［下］承安元年十月六日以桂林蔵本移點了／八校了
點本云／延久六年（一〇七四）六月七八十一十二四箇日之間於南／泉房奉受諸會了
承保二年（一〇七五）正月七日於同處奉受布／字八字了　良祐／如師本移點了／　梵本同寫了在別師本云長保五年（一〇〇〇）四月十日於太宰府之東／大山寺於入唐之次受學已了皇慶記／　傳受師止觀入道／角點宗忠供奉之點也朱點此度點也／本師之御讀様以丹於字左點着之、云
寛徳二年（一〇四五）二月九日於丹州池上奉讀了／安慶云、
本角今緑本丹今紺寫了／金剛佛子良祐云、

（朱書）「同八月卅日移點訖／委交了」
［2］長元十年（一〇三七）四月五日巳尅於勝林院
奉受了　釋長宴
長暦元年（一〇三七）十一月廿九日於大日寺重奉
受此軌了
同三年九月廿七日於同處對受軌中印了　長宴
長久四年（一〇四三）二月四日於大原持明房重奉
受供養會了
同年七月四日於同處重奉受諸會了同日別時布字八
印等重稟受畢　釋長宴
寛德二年（一〇四五）十一月一二三日之間於南谷
南泉房重奉從大師阿闍梨奉受此軌置則接傳法之末
序而已又別時布字八印等奉稟受已了
康永四年（一〇三七）八月廿五日以右本敬書寫／
訖尤為證本者也　金剛仏子□□　／同九月七日交
合了

◎第四群点資料
20東寺　一巻　（巻下）　〈点本論考〉
○平安後期寫、白点（仮名、第四群点、平安後期）

◎池上阿闍梨点資料
21高山寺第一八四函第73号　一帖　（巻上）
○院政期寫、朱点（仮名、池上阿闍梨点、院政期）
（奥書）（朱書）「イケカミアサリノ第三點」

◎第六群点（叡山点）
22東寺金剛蔵　一帖　〈新版点本書目〉［叡山点］・
〈点研〉［第六群点］・〈点本論考〉［叡山点］
（奥書）永延三年己丑（九八八）三月十八日讀點了僧仁
孝本
寛弘四年丁未（一〇〇七）八月卅一日點重僧仁本

◎宝幢院点資
14石山寺校倉第九函第6号　二巻　（西墓点の項参照）

15東寺観智院又別第三函第1号　一帖　（巻上）
○平安後期寫、朱点（仮名、寶幢院点、平安後期）、墨点（仮名、寶幢院点、平安後期）、他室町中期の墨点あり

16東寺観智院第一六一函第11号　一帖
○院政期寫、朱点（仮名、寶幢院点、院政期）
（奥書）（朱書）「點交了」

17高山寺重文二部363号2　一帖　（巻下）
○院政期寫、朱点（仮名、寶幢院点、永久六年）、墨点（仮名、院政期）
（奥書）（別筆）「同年同月二日奉受了」
永久六年（一一一八）正月廿一日「□□闍梨共□
奉受了／□覺」
（別筆2）「仁安二年（一一六七）十月朔日於観音寺
恵眞／供傳受了」

18大東急記念文庫24-137-925　二帖
○久壽三年（一一五六）寫、覺成本、高山寺旧蔵、朱点（仮名、寶幢院点、久壽三年）、墨点（仮名、院政期）

19東寺観智院第二九函第25号　二帖〈新版点本書目〉
〈点研〉
○康永四年寫、朱点（仮名、寶幢院点、康永四年）、墨点（仮名、康永四年）
（奥書）［1］康永四年（一三四五）七月二日以右
本敬書寫／訖尤為證本者也　金剛仏子□□

◎仮名点資料

23高山寺重文二部363号1　一帖　（巻上）

○永久六年寫、朱点（仮名、永久六年）、墨点（仮名、永久六年）

（奥書）永久六年（一一一八）三月十五日於南圓房／書畢

同月廿二日移點畢

（別筆）「仁安二年（一一六七）九月廿六於観音寺傳受了／奉随上□□聖生与／惠眞共傳受了」

《天台宗系カ》

◎訓点未詳

24四天王寺　一巻　〈昭和現存天台書籍綜合目録〉

（紙背）奥書寛仁二年（一〇一七）八月年號／元永仁安四年（一一六九）嘉応元年（一一六九）／元中九年（一三二九）八月四五六三日ケ日受入此上巻了

山門派関係の資料は、第一群点及び仁都波迦点、宝幢院点、第四群点、池上阿闍梨点、第六群点または叡山点、仮名点と点法も多様であるが、平安中期からの資料が存し、仁都波迦点資料の資料番号13には、本奥書中、延久六年、承保二年の奥書に良祐、長保五年の奥書中に皇慶、宗忠の名が、寛徳二年の奥書に安慶の名が見えている。平安後期以降は、皇慶、長宴辺りを基点に谷流の内で訓読の場が形成されていたように見受けられる。

真言宗関係

《広沢流関係》

◎円堂点資料

25西大寺　二帖　〈点研〉

（奥書）長保四年（一〇〇二）九月六日讀了　小僧平救興隆御房御傳

萬壽三年（一〇二六）二月十六日讀了　於神護之根本本度唐本

長元五年（一〇三二）六月二日於本寺受了　頼尊

右大法者上下両巻是池上故平救闍梨之被傳本也彼闍梨再受之由被記之續即被授律師律師亦令被授之

尤可貴重而観恵為其門弟書寫

仁平四年（一一五四）三月廿九日奉受了　佛子聖譽

26高山寺　一帖　（巻下）　〈点研〉

（奥書）成蓮房阿闍梨御房奉受了

27東寺観智院第一三一函第62号　二帖

○延文元年（一三五六）寫、朱点（仮名、円堂点、延文元年頃）

（奥書）長保四年平救、萬壽三年、長元五年頼尊保延七年隆勝本奥書

延文元年（一三五六）丙申四月十一日以勧修寺慈／尊院経蔵隆勝自筆本命栄済闍梨／書寫之奥記同彼自筆也件隆勝／者隆眞之付法隆眞者寛意／弟子也権少僧都杲寶五十一　（以下略）

真言宗では、円堂点加点資料が三点認められ、西大寺蔵本・東寺観智院蔵第一三一函第六二号の本奥書に平救・頼尊・聖誉の名が、東寺観智院蔵本にこの他、隆勝・杲寶の名が認められて、広沢流の訓読の流れが、平安後期初頭の平救辺りから確認される。

《小野流関係》

◎東大寺点資料

28高山寺重文三部40号　二帖

○永久三年寫、朱点（仮名、東大寺点、院政期）
（奥書）［1］永久三年乙未（一一一五）五月一日書了
禅明寺廊之
（別筆）「保延二年（一一三六）三月廿三日□□□奉受了」

29東大国語研究室特18　一帖　（第一）
○長寛二年寫、朱点（仮名、東大寺点、長寛二年）、石山寺舊蔵
（奥書）長寛二年（一一六四）初冬廿八日於勧修寺西明院移點了／求法沙門朗澄

30東寺宝菩提院三密蔵　二帖　〈点研〉
（奥書）承安三年（一一七三）九月十四日移點了
金剛佛子顕杲

31醍醐寺四九六ー146　一帖　（巻下）　〈醍醐寺研究紀要8・築島論文〉
○院政期寫、尾欠、東大寺点
真言宗小野流の関係資料と判断される東大寺点加点資料は、四資料が管見に入ったが、院政期以降の加点資料であって、奥書からは訓読の系統的展開の跡を十分に辿ることはできない。

訓点等未詳

◎天台関係か

32無動寺　一巻　〈昭和現存天台書籍綜合目録〉
承徳二年（一〇九八）二月八日未時書寫了　傳領勒長

33吉水蔵　二帖　〈昭和現存天台書籍綜合目録〉
（奥書）建暦二年（一二一二）五月六日勘付科文了
花押

校本批記也

資料に掲げた他に、訓点語と訓点資料62輯掲載の崎村弘文氏の論文に拠れば、[注1]詳細は不明ながら九州大学に2点（ともに院政期の資料で、西墓点の加点資料と東大寺点の加点資料）の玄法寺儀軌の下巻に当たるかと思われる資料が存する由である。

玄法寺儀軌の平安鎌倉時代における加点資料の分布

天台宗系統	平安初期	平安中期	平安後期	院政期	鎌倉時代
西墓点			5	3	1
寺門系				1	
第一群点		1	1	1	
宝幢院点			2	3	1
第四群点			1		
池上阿闍梨点				1	
叡山点		1			
仮名点				1	
真言宗系統					
円堂点				2	1
東大寺点				4	

次に、胎蔵四部儀軌の内、大毘盧遮那成仏神変加持経蓮華胎蔵菩提幢標幟普通真言蔵広大成就瑜伽［青龍寺儀軌］三巻（法全）の加点資料は、以下のものが管見に入った。

真言宗関係

《広沢流関係》

◎円堂点資料

34高山寺第一八四函第65号　一帖　（巻中）

○院政期寫、朱点（仮名、円堂点、院政期）

◎浄光房点資料

35東寺観智院第二九函第2号　二巻

○天永四年寫、朱点（仮名、浄光房点、天永四年）

（奥書）［1］（朱書）「天永四年（一一一三）閏四月十日庚申於冷泉院移點畢　大法師宗範之本／同十六日奉交了」

［2］（朱書）「天永四年潤三月廿一日於冷泉院壇所奉寫了」

「同四月十六日移點了　求法比丘宗範之本也／廿五日奉受了」

（別筆）「永徳四年（一三八四）正月十四日對讀了權大僧都賢寶生年五十二／此本禪林僧正請来也与智證本大異也」

真言宗広沢流関係の資料として、円堂点資料と、浄光房点資料とが認められる。

《小野流関係》

◎東大寺点資料

36醍醐寺三寶院経蔵三七五ー1　三帖〈点本書目〉〈醍醐寺研究紀要8・築島論文〉

○永保二年寫、朱点（仮名、東大寺点、応徳三年）

（奥書）［巻上］応徳三年（一〇八六）壬二月廿五日大谷北堂移點了午時也／（別筆）「兼俊之本」／（別筆）「沙門覺嚴之本」

［巻中］永保二年（一〇八二）七月十六日午時許書寫了　兼俊之本

応徳三年閏二月廿七日午時移點了　大谷北堂□也

［巻下］永保二年七月十六日午時許書寫了兼俊本

（朱書）「応徳三年閏二月廿七日午時移點了　大谷北堂□也」

（別筆）「治承五年（一一八一）正月廿八日傳領之求法沙門覺嚴之本」

（注、［巻中］ノ奥書ハ点本書目ニヨル、他ハ築島論文。）

37東寺観智院第一三四函第1号　二帖

○嘉承三年（一一〇八）寫、朱点（仮名、東大寺点、元永二年）、墨点（仮名、院政期）

（奥書）［中］嘉承三年八月十日酉時書了／小野大乗院之内南小御堂書之

（朱書）「元永二年十月九日申時以松本御本點了」

天養元年（一一四四）八月三日於金剛峯寺奉受円如房了／求法沙門顕嚴／同學仁和寺中納言内供阿闍梨

［下］天仁元年（一一〇八）八月廿一日於酉尅書之了

長承三年（一一三四）四月九日傳受了　□（寶カ）海

天養元年八月四日傳受了於金剛峯寺顕嚴／検校阿闍梨御傳／同學仁和寺中納言内供

平治元年（一一五九）七月八日於金剛峯寺奉受了／□□□　宗恵

38高山寺第六二函第124号　三帖

○院政期寫、朱点（仮名、東大寺点、保安二年）

（奥書）［1］比交了／（別筆）「高野傳受了」

［2］（朱書）保安二年（一一二一）正月十六日比交了

「同五月十一日移點了」／（別筆）「高野傳受了」

［3］（朱書）「保安二年辛丑五月十一日移點了」／高野傳受了

39石山寺深密第六九函第9号　二帖　（巻上・中）
○院政期寫、朱点（仮名、東大寺点、院政期）

40高山寺第一八四函第75号　一帖　（巻中）
○院政期寫、朱点（仮名、東大寺点、院政期）

41高山寺第一八四函第76号　一帖　（巻下）
○院政期寫、朱点（仮名、東大寺点、院政期）
（奥書）交了
（朱書）「同五月七日於交點了」

42高山寺第一四九函第61号　一帖　（巻上）
○鎌倉初期寫、朱点（仮名、東大寺点、鎌倉初期）
（奥書）大毘盧遮那経巻上或本内題也
（別筆朱書）「交點了」

《高野山関係資料》
◎中院僧正点資料
43高野山西南院　一帖　（巻中）　〈点本論考〉
○院政初期寫、朱点（仮名、中院僧正点、院政初期）
（奥書）解脱房阿闍梨奉受了

未詳
◎特殊点
44石山寺校倉第九函第4号　三巻
○平安中期寫、朱点（仮名、特殊点、長保頃）、墨点（仮名、長久二年頃）
（奥書）［下］長久二年（一〇四一）十一月九日讀受了
（別筆）「延久四年（一〇七二）七月廿九日始傳申／巽院君潤六月了」
（別筆2）「承暦三ー（一〇七九）三月七日奉傳教舜良釋二院了」

◎訓点未詳
45吉水蔵　三巻一冊　〈昭和現存天台書籍綜合目録〉
（奥書）永祚二年（九九〇）於高野山護永寫

小野流関係の東大寺点加点資料は、平安後期末以降の加点資料であるが、七点存する。さらに、中院僧正点加点資料が一点存して、真言宗における加点資料のヲコト点法の多様さが認められる。系統未詳分のうち、青蓮院吉水蔵の資料番号45の資料は、奥書に高野山とあって、或いは、真言宗高野山と何らかの関係を有する資料かもしれない。[注2]

青龍寺儀軌の平安鎌倉時代における加点資料の分布

真言宗系統	平安初期	平安中期	平安後期	院政期	鎌倉時代
円堂点				1	
浄光房点				1	
東大寺点			1	5	1
中院僧正点				1	
特殊点			1		

大毘盧遮那広大儀軌［広大儀軌］三巻（善無畏）の加点資料は、以下のものが管見に入った。

真言宗関係
《小野流関係》
◎東大寺点資料
46醍醐寺四九六ー144　一帖　（巻下）　〈醍醐寺研究紀要8・築島論文〉《広大儀軌カ存疑》
○東大寺点
（奥書）（朱書）「長承三年（一一三四）七月一日於遍

智院移點了」

47石山寺深密第六九函第26号　一帖　（巻上）
○院政期寫、朱点（仮名、東大寺点、院政期）

48石山寺深密第六九函第13号　一帖　（巻中）
○院政期寫、朱点（仮名、東大寺点、院政期）

49東寺観智院第一三一函第59号　三帖
○南北朝時代寫、朱点（仮名、東大寺点、文和三年）
（奥書）［下］建久四年（一一九三）十月七日奉傳受／栄然（以上本奥書）
文和三年（一三五四）十月八日子尅於東寺西院一部三卷拭老眼加交點畢／杲寶四十九

《石山寺関係》
◎順暁和尚点資料
50石山寺校倉第九函第8号　二巻
○平安中期寫、墨点（仮名、順暁和尚点、淳祐点カ）
善無為の広大儀軌は東大寺点加点資料が四点、平安中期の順暁和尚点加点資料が一点認められる。

広大儀軌の平安鎌倉時代における加点資料の分布

真言宗系統	平安初期	平安中期	平安後期	院政期	鎌倉時代
東大寺点				3	1
順暁和尚点		1			

次に、攝大毘盧遮那成仏神変加持経入蓮華胎蔵海会悲生曼陀羅広大念誦軌供養方便会・攝大毘盧遮那経大菩提幢諸尊密印標幟曼陀羅儀軌・攝大毘盧遮那成仏神変加持経大悲胎蔵転字輪成三藐三仏陀入八秘密六月成就儀軌［攝大儀軌］三巻（善無畏）の平安鎌倉時代の加点資料は、以下のとおりである。

天台宗関係
◎第四群点資料
51東寺観智院第二六函第15号
○平安初期寫、白点（仮名、第四群点、平安中期）奥書ナシ

真言宗関係
《広沢流関係》
◎円堂点資料
52東寺三密蔵　三帖〈新版點本書目（円堂点）〉〈点研〉
（奥書）長元七年（一〇三四）閏六月十四日點之
長元六年（一〇三三）四月二十九日書了
康平三年（一〇六〇）九月二十日受始十月七日終之廊僧都所傳也
嘉承二年（一一〇七）五月廿一日南岳律師奉受　静寛　傳領賢能之

53高山寺重文一部26号　三帖
○院政期寫、朱点（仮名、円堂点、院政期）、江戸時代包紙「理明房相伝之本也」

54高山寺蔵第一八四函第79号　一帖（巻第三）
○院政期寫、朱点（仮名、円堂点、院政期）

《小野流関係》
◎東大寺點資料
55石山寺校倉第二六函第58号　一帖　（巻上）
○久壽三年寫、朱点（仮名、東大寺点、久壽三年）
（奥書）久壽三年（一一五六）四月十日於勧修寺寶満院移點了東寺沙門叡眞

《高野山関係》

◎喜多院点資料

56高山寺第一三二函第10号　一帖　（巻上）

○院政期寫、朱点（仮名、喜多院点、院政期）

57高山寺第一八九函第39号　二帖　（巻中・下）

○院政期寫、朱点（仮名、喜多院点、院政期）

58高山寺第一九〇函第10号　一帖　（巻中）

○院政期寫、朱点（仮名、喜多院点、院政期）

摂大儀軌については、平安中期の第四群点加点資料が認められ、天台宗関係かと推定される他は、何れも真言宗関係の加点資料であって、円堂点加点資料が三点、東大寺点加点資料が一点、喜多院点加点資料が三点認められる。

摂大儀軌の平安鎌倉時代における加点資料の分布

天台宗系統	平安初期	平安中期	平安後期	院政期	鎌倉時代
第四群点		1			
真言宗系統					
円堂点			1	2	
東大寺点					1
喜多院点				3	

以上の胎蔵四部儀軌の現存加点資料について、点法未詳で未確定の資料を除き整理して一覧表にしたものが、それぞれの儀軌の末尾に配した表である。

天台宗・真言宗の加点資料ともに平安初期の資料は確認できない。天台宗の加点資料は、玄法寺儀軌において、点法も多様に現れる以外は、天台宗系の可能性のある資料は、青龍寺儀軌の特殊点、摂大儀軌の平安中期の第四群点が存するのみで、平安後期と院政期および、鎌倉時代には、青龍寺儀軌、広大儀軌、摂大儀軌の現存加点資料が管見に入らない。また、現存資料は、平安後期・院政期においての資料が多く、鎌倉時代になるものが少ない。これに比較して、真言宗関係の加点資料は、胎蔵四部儀軌のすべてにわたって分布し、特に、院政期に集中している。鎌倉時代の加点資料は減少傾向にある。

以上の傾向は、管見の及んだ現存の加点資料の整理に基づくものであって、遺漏も多いことと思われ、また、資料そのものの現存自体が、偶然性に基づくものである可能性を否定できないものであると考えられるが、天台宗における胎蔵儀軌の訓読の伝統は、胎蔵四部儀軌にわたって幅広く訓読されたものではなく、特に平安後半期には、専ら玄法寺儀軌の訓読が行われていたものであると考えられるのではなかろうか。一方、真言宗における胎蔵儀軌の訓読は、胎蔵四部儀軌の総てにわたって訓読するという伝統が存し、天台宗と真言宗との胎蔵儀軌の訓読における伝統の違いをある程度反映した結果であると判断することができるのではあるまいか。

二、宗派と訓読法の伝承

以下、天台宗・真言宗にわたって加点資料の存する玄法寺儀軌について、その訓読語の問題を取り上げる。取り上げた資料は、天台宗寺門派の西墓点資料と、真言宗小野流の東大寺点加点資料である。

先にも述べた如く、天台宗寺門派の玄法寺儀軌の訓読の場の形成と伝統は、現存資料の奥書などからある程度跡づけることができるものと判断されるが、そうした玄法寺儀軌の訓読の伝統は、訓読語または訓読法のレベルの伝承をどのように果たしたものであるかが問題とされ

よう。

以下に示したものは、各資料の訓読法の比較である。比較例①、および比較例②は、資料番号5の東寺観智院第二九函第一号と東大国語研究室蔵の資料番号8の二資料の訓読法の比較である。資料番号5の東寺観智院蔵本には、計三種類の訓点が加点されている。二種類の朱点と一種類の墨点とであって、そのうち二種類の朱点は、最初に加点された朱点が薄く、後の加点と認められる朱点は濃く全巻にわたり、第一次の朱点をなぞるように重ねて加点されたものである。墨点は、一次の朱点が加点された後、二次の朱点が加点される前に加点されたと認められるもので一次の朱点に対して避けるように位置をずらし、又は、左傍の訓などとして加点されたものである。三種類の点は何れも平安後期の加点であると認められる。一方、東大国語研究室蔵の資料番号8の資料は、同じく西墓点の加点資料で、文治二年（一一八六）の加点と認められるものであるが、ヲコト点等に少々不安定な感じの存する資料である。約二百年を隔てた加点資料である、この二資料につき、儀軌の陀羅尼部分を除いた漢文本文を取り上げて、その訓読法を比較しその異同を取り上げることとする。

比較例①

《東大本No.8》

1、文の断続・語序

執羅（平）索（サクシヤクを）（とりて）

三七遍加持（して）

行ー者稽ー首礼（して）

修行　幾時ー月（に）

《観智院本No.5》

（「」を付したものは墨点）

執羅索（とれりを）。

三七遍加持（せよ）。

行者稽首（すべシ）礼（することの）。

修行　幾時月（にしてか）

2、実字訓

握（トレ）智ー度（ちにアサ（ヘ）てを）

定恵　内　叉　拳（にせよ）

随（ふ）教命（に）。

虎（の）牙（ハ）

3、助字

當（へ）結（の）金剛印（をして）。

令（よ）法眼道（く）…久住（せ）。

4、読添語

左（に）慧ー方

施（平）無畏（セヨ）。

内縛（去）（せよ）。

并（せて）妃（平）（あり）。

定（にはトリツレ）操（ヒヤウ）瓶（去濁）。

定（にはトリ（ツ）れを）持　杖（去濁）。

水天

二空　開（ヒラキ）

風（トれ）捻、空輪節（のを）（刮）。

戟（キヤクの）印（なり）。

應（し）結（ふ）蓮花印（を）。

大護（をモテ）

5、音読・訓読

吽（平）ー字（の）聲（コヘ）（刮）、

握（ニきれ）智度（を）

定恵　内　叉　拳（ちにマシへて）（にせよ）

随（へ）（刮）教命（に）

虎（キ）（刮）牙（「刮」）

當（にし）結（ふ）金剛印（のを）。

令（して）法眼道（シメヨ）…久住（を）（く）（せ）。

左（の）慧方（もて）

施無畏（をせよ）。

内縛（にせよ）。

并（て）妃（とあり）。

定（にはトレ）操（を）瓶（去濁）。

定（にはトれ）持（は）杖（を）。

水天

二空　開（いて）

風（は）捻（とれ）空輪節（のを）（刮）。

戟（キヤク）（入濁）印（なり）

應（し）結（ふ）蓮花（もて）印（の）。

大護（を）

吽字（の）聲（上）、

各（朝）差別。
并（せて）二（音）修羅王。（とあり）
執（り）（朝）刀（と）（去）
眷属諸（ライケ）仙、
安（ヤス）本ー處（に）
五輪（を）投（トウ）（平）地（に）
不（して）断（タ、ス）大乘教（を）

《他類例四例》

各ー差別。（なり）
并（てフタ「リノ」）二（朝）修羅王。（とあり）
執（て「して」）刀（を「を」）
眷属諸ー仙
安（して）（去）本處（に）
五（平）輪（を）（去）投（ナケテ）地（に）
不（して）断（せ）（音）大乘教（を）

6、字音

波（ト）頭
雨（上）ー雲（の）（上）

波（去）頭（ッ）（上濁）
雨（去）ー雲（の）「（平）」

訓読法の異同は、右に掲げたごときものであるが、文の断続の異同や語序の異同をはじめ、実字の訓、助字の訓法、読み添え語、音読訓読の異同や字音の異同などの各項目に互っての異同が存する。

先に掲げた比較例①は、東京大学国語研究室蔵本と東寺観智院本の朱点との訓読法を比較し、訓読が異なるものを掲げたもので、次の比較例②以外の確認した全異同例である。後に一覧表を掲げたが、最上段の異同用例数がこれにあたる。総数三二例を確認した。

比較例②

《東大本No.8》

1、文の断続・語序

内拳、申（ノヘヨ）風輪（を）。
火入（はて）胸前（へに）（ソハタテヨ）側

《観智院本No.5》

内拳、申（「ノヘヨ」）風輪（を）。
火入（はて「の」）胸前（へに）（て「ソハタテヨ」）側（に）（ソ）（はめよ）

2、実字訓

蓮ー花（の）敷（ヒラケタリ）
寶（の）（音）上（カミに）

《他類例九例》

蓮華（ヲ）敷（シケ「ヒラケタリ」）
寶（の）（音）上（へに「カミニ」）

3、助字

而（して）在（アリ）黒ー蓮（の）（去）上（へに）。

《他類例三七例》

而（も「して」）在（り）黒蓮上（の）（へに）。

4、読添語

堅ー惠（の）杵（をヲ）
頂ー髪（は）垂（れり）（の）（に）左肩。

《他類例三七例》

堅ー惠（「ノ」）杵（を）
頂ー髪（は）「タレリたり」（の）（に）左肩。

5、音読・訓読

其（の）身（朝）浅（なる）黄（音）色（音）（なり）。
頭ー冠（して）（上）

《他類例一〇例》

其（の）身（音）（「朝」）浅（カウヘニに）黄（なる）（音）色（音）（なり）。
頭「ー」冠（して）「（上）」（音）

《他類例一〇例》

6、字音

金剛牙（去濁）菩薩
彗（サイト）（平）

《他類例一三例》

金剛牙（ケ）（上濁）「去濁」菩薩
彗（セイ「サイト」）（平）

《他類例三例》

［比較例②の例外］

二空互（ひに）相絞（ひマヅヘ）
空（せよ）竪

二空互（ひに）相絞（ひ「マシヘヨ」マヅヘ）
空、竪（音にせよ「タテヨ」）

比較例②に掲げた訓読法の異同例は、同じく東京大学国語研究室蔵本と東寺観智院本の朱点との訓読法を比較した異同例であるが、東大蔵本の訓読は、観智院蔵本の朱点の訓読とは異なるものの、同じく観智院蔵本に加点された墨点の訓読法に一致するもので、その用例数は上表、訓読法異同用例数表の第二段目の如く分布し、総数八七例を認めた。

字音	音読訓読	読添語	助字	実字訓	語序	文の断続	
2	8	12	2	4	1	3	東寺観智院蔵本朱点 東京大学国語研究室蔵本 訓読法異同数
18	12	39	1	11	4	2	東寺観智院蔵本朱点 東京大学国語研究室蔵本 訓読法異同数 (墨点一致)
4	36	178	3	21	7	35	東寺観智院蔵本 随心院蔵本 訓読法異同数
1	30	234	4	24	8	45	東寺観智院蔵本 石山寺蔵本 訓読法異同数
0	15	188	18	5	27	69	高山寺蔵本 東京大学国語研究室蔵本 訓読法異同数

即ち、院政期最末期の加点と認められる東大蔵本の訓読は、平安後期の観智院蔵本に認められる二種類の訓点の訓読法の内、墨点の訓読法に一致率が高くこの系統の訓読（墨点は東寺観智院蔵本の奥書の実相房頼豪の訓読と対応するものであろうと推定される）を受け継いだものであろうと考えられる。但し、比較例に例外がある如く、東大蔵本の訓読は、東寺観智院蔵本の墨点の訓読を細部にわたるまで厳密に伝えたものではなく、訓読法の異同が存するのであって、そこには院政期における、訓読法の改変が介在するものと考えられる。また、観智院蔵本の中における朱点と墨点の訓読法の異同も又、平安後期における改変の跡を示すものと考えられよう。

次に、他の西墓点資料の平安後期、院政期の天台宗寺門派（西墓点資料）の訓読について触れる。右に掲げた訓読法異同用例数表の第三段目に示したものは、同じく東寺観智院蔵本の訓読と、資料番号3随心院蔵平安後期点の訓読とを比較した訓読法の異同数である。随心院蔵本については、先にかかげた奥書を有する資料であるが、奥書は、「承暦二年四月廿六日（以下破損）」とあるのみであって、奥書からは当該資料の資料性は明確ではない。西墓点の加点によって、天台宗寺門派系統の資料と推定されるものであるが、当該資料は、他の西墓点資料とは陀羅尼の加点について些か異なった特徴を有する資料である。陀羅尼の漢字音について有気音・無気音、又、その清濁をそれぞれ区別仕分けて加点した資料であり、すくなくとも玄法寺儀軌の他の西墓点資料においては陀羅尼の加点に、圏点や双点、三角形の声点などを使用し清濁を区別したものは存するものの、有気音・無気音を区別するような方法を用いたものを知らない。又、一般に西墓点資料においてこのような注音方式を採った儀軌の資料を寡聞にして知らない。すなわち、陀羅尼についてではあるが、一般の西墓点資料とは異なった字音の研究的態度が伺えるものと判断される資料である。このような性格を持つ随心院蔵本の漢文部分について東寺観智院蔵本の訓読と比較したものが訓読法異同用例数表の第三段の用例数である。この訓読法の異同の比較は、随心院蔵本の訓読法と東寺観智院蔵本の朱点との異同例を中心としたものであるが、随心院蔵本の訓読が観智院蔵本の墨点の訓読と一致を示した場合これを除外

したものである。計、二八四例の異同例を確認した。その内の読添語の異同例は一七八例とかなりの用例数に登るが、観智院蔵本で読点を打つなどして読添語のない箇所に、随心院蔵本では助詞「と」を読み添えた異同例が、八九例出現する。

訓読法異同用例数表四段目に掲げたものは、同じく東寺観智院蔵本の訓読と資料番号6の石山寺校倉第九函第6号の訓読を比較した異同の用例数を掲げたものである。石山寺校倉第九函第6号には、朱点、白点、墨点、緑青点の四種類の訓点が加点されており、内、朱点と白点とは宝憧院点を使ったものである。墨点と緑青の訓点は、西墓点である。ここに、比較の対象として取り上げた訓点は、墨点で、奥書の別筆の久安の記事に対応するものである。観智院蔵本との比較においては、前と同様観智院蔵本の朱点との比較を行ったものであるが、朱点との異同例も観智院蔵本の墨点と一致する例は、これを取り上げていない。その異同の総数は、三四六例である。このうち、読添語の異同例二三四例については、前と同じく、観智院蔵本において読添語のないところに、石山寺蔵本に助詞「と」を読み添えた例が、九五例。特に文末において観智院蔵本が、動詞の命令形又、終止形に訓読するところや、「あり」「なり」を読み添えた箇所に、石山寺蔵本墨点では「り」「たり」を読み添えて別の読み添えを行っている例が、六二例存している。読添語の異同二三四例中の一五七例は類型的な異同例である。

石山寺蔵本中の緑青点の訓読は、この緑青点自体が、ある部分では剥落がはげしく、玄法寺儀軌下巻の全文の読解が容易ではなく、全文を対象とした訓読法の比較は、今後に委ねたいと思うが、比較的条件よく訓点の伝えられている部分を東寺観智院蔵本の訓読と比較すると、墨点よりもその一致率は高いと見受けられる。

以上のように、平安後期、院政期の天台宗寺門派、西墓点の加点資料における訓読法は、伝承的な側面を強く持ちながらも、異同例がかなりの数に登る資料が併存していたものと考えられる。

次に、真言宗小野流における訓読の問題を取り上げることとする。訓読法異同用例数表の最下段は、資料番号28の高山寺蔵本と資料番号29の東大国語研究室蔵本の訓読を比較した異同例である。具体的な比較例は、以下に比較例③として掲げたものである。

比較例③

1、文の断続・語序

イ、文の断続

《高山寺蔵本No28》

悉皆懺悔　不復作。

安立　器世間、

《東大蔵本No29》

悉皆懺悔　不復作。

〈他類例四五例〉

安立　器世間。

〈他類例二二例〉

ロ、語序

我今依經　要略　説自利利

他悉地法、真　言次第方

便行發起　信解勝妙門。

我今依經　要略　説自

利利他悉地法真言次第

方便行　發一　起　信

解勝妙門

〈他類例二六例〉

2、実字訓

在　於白蓮花

壽命悉　焚滅

次　摂　金剛甲。

在　於白蓮花

壽命悉　焚滅

次　摂　金剛甲。

轉身（反）作薩埵。
宮中想浄妙賢瓶與閼伽。

3、助字

先令自心（反）離塵垢。
願［令］…當得…
而

而　奏諸事樂。

［而］
次第應安布。
暉發　猶浄金。
尊形猶皓素。
无知　所害、身

4、読添語

金色　妙白衣
道師諸佛母
礼　十方佛
焔鬘遍圍繞。
喜怒顯形色。

轉身（反）作薩埵。
宮中［想］浄妙賢瓶
［與］閼伽。

先令自心（反）離塵垢。
願令三…當得二…
［而］

〈他六例〉

［而］奏諸事樂。

〈他三例〉

而
次第應安布。
暉發　猶浄金。
尊形猶皓素。
无知　所害身

金色　妙白衣
道師諸佛母
礼　十方佛
焔鬘遍圍繞。
喜怒顯形　色。

〈他類例一七九例〉

5、音読・訓読

捨衆苦所集身
如金剛所持
赤色具　威光。

捨二衆苦所集、身一
如金剛所持。
赤色　具　威光。

〈他類例一二例〉

資料番号28の高山寺蔵本、資料番号29の東大国語研室蔵本ともに、西墓点資料などに比較すれば訓点は粗であって、片仮名の加点が少ない。ヲコト点主体の加点である。

異同例数は、表の通りであるが、西墓点資料間の異同例数の分布に比較して、片寄が存することが見て取れる。まず、実字訓の異同が五例、音読訓読の異同が一五例、字音に関しての異同の確例が見あたらないことで、西墓点の資料間の異同に比較して、この項目の異同例が比率としては低いように認められる。この違いは、加点の粗密にも関係のあることと認められ、東大寺点加点の二資料は片仮名や声点、合符等の加点が詳密ではなく、そもそもこれらの異同が確かめにくい条件にあることである。一方、文の断続に六九例、語序の異同に二七例、助字の訓法の異同には一八例が認められる。これらの異同用例数は、西墓点資料間の異同数に比べて高い比率を占めて出現していると認められるのではなかろうか。例えば、語序の異同は、西墓点資料においては、読添語の異同例が多く出現する場合でも、一桁の用例数を示しているが、東大寺点資料では、二七例存し、しかも、比較例③にも実例を示したごとく、比較的長い部分に亙っての語序の異同が多く認められる。

この東大寺点二資料間の比較は、巻上の漢文本文の訓読例を比較したもので、先の西墓点の比較は巻下について行ったものであって条件が異なる。玄法寺儀軌の漢文

本文は、大正新修大藏経にして、上巻が四四〇行、下巻が五〇九行ほどであって、上巻の言語量が少ないにも関わらずこれらの異同例が多く出現している。

この文の断続や語序の異同は、原文の理解そのものの異同にかかわる問題であって、訓読文の基本的な文構造にかかわる問題であると判断される事象であるし、助字の訓法は漢文訓読の訓読調を支える重要な要素の一つであると考えられる。

このような、西墓点資料間の訓読法の異同の分布と、東大寺点資料における分布の違いは、同時代の宗派の別による訓読語、訓読法の伝承の違いを物語るものと解釈される。つまり、天台宗寺門派における訓読法は、訓読の基本的な枠組みである文の構造などは伝承され、その構造を基に、言わば部分的な改変が行われたものと考えられる。これに比較して、真言宗小野流の東大寺点加点資料では、文の構造を含めて同時代にかなりの距離のある訓読が並存していたことが認められる。このことは、玄法寺儀軌の訓読に関して真言宗小野流においては、必ずしも訓読法の伝承にとらわれない、かなり自由な訓読の実態の存在が想定されそうである。

このような、寺門派における訓読語・訓読法の伝承は、先行の訓読を基本的な部分で継承したものであり、真言宗小野流における訓読が、時として大幅に改めることが許されるもの、また、極端な場合先行の訓読に関わらない新たな訓読が創造される素地が存するものであったと見ることは、以下の点からもその傍証が得られる。いま玄法寺儀軌に限って問題とするが、第一点は、寺門派資料における加点状況で、一資料に時に時代を隔てた複数の訓点が重ねて加点されたものが目立つ、一方、真言宗小野流の資料は、単一の訓点が加点された資料であることである。このことは、特に、寺門派資料において、先行の訓読を問題としつつ、訓読が展開されていた状況を想定させる。第二点は、西墓点資料の奥書の記載が、本奥書を含めて概して詳しく記載されているのにくらべ、東大寺点資料の奥書が簡素であることである。このことも西墓点資料において先行の訓読になにがしかの権威を認めていた証であろう。

これらのことは、寺門派において先行の訓読に対する関心の深さを、小野流における訓読の改変の姿を示したものであると認められるのではなかろうか。

おわりに

一般に、平安時代後半期以降の訓点資料は、専ら移点が行われ、言語変化が少ないと把握されてきた。平安後半期の訓点資料に対するこうした把握は、訓点資料言語の時代性の問題、例えば、院政期の資料に用いられる訓読語が更に遡った時代の漢文訓読語の産物であるという問題を生み、また、平安時代後半期以降の訓点資料の言語が硬直化した変化に乏しいもので、この期の訓点資料は資料的価値が低いとした印象を与えてきた。しかし、平安後期・院政期においても、天台宗寺門派の如きは、訓読語の部分的な改変が、真言宗小野流においてはかなり大幅な訓読語の改新が行われていたと認められる資料が存する。[注3] 仏典において儀軌といわれる資料群の中には、平安後期・院政期において生産的な訓読活動が行われていたと認め得る資料が存在した。これらの資料については、平安時代後半期から鎌倉時代にかけての（文語・文章語としての）漢文訓読語の歴史的変化を語る事が可能であると認められる。[注4] 又、同文的比較という方法によって主として共時的な問題として、宗派間の訓読語の違いが論ぜられて来ているが、真言宗小野流の如き訓読の改新の実態が存する以上、資料に現れた訓読語の性格を把握するためにも、各宗派における資料の扱われ方を検討するなどの方法論的な反省が求められるものと判

断される。

本稿関係血脈

《天台宗寺門派血脈》

大師（円珍）―宗叡
　　―猷憲―康済―増命―京意―敬一―運昭―行譽―餘慶―
　　―勝算―慶祚（龍雲坊初）
　　―文慶―成尋
　　―穆算
　　―明肇―永円（平等院根本）
　　―明尊―良朝―覺猷―仁尊（桂陽房）
　　―観修―教静―心譽―行円（唐房）―頼豪（實相房）―明澄
　　―公円
　　―覺意（肥後守藤那恒子）
　　―快譽
　　―頼範
　　―行観＊
　　―頼尊（披雲房）
　　―千算（慶祚入室）
　　―長守
　　―悟円

＊―良意―行勝―家意（醍醐房）
　　―良修―（四代略）―長乗（住心院元亨三―十一―五卒）（八十）
　　―勝運

（三井寺灌頂脉譜による）

《天台宗山門派血脈》

円仁―（六代略）―皇慶―長宴（大原僧都）―經暹―實算（南円房阿―一）
　　―範胤―良祐―忠尋―眞恵
　　―教舜
　　―最厳…覺成

（天台血脈による）

《真言宗広沢流血脈》（大聖寺住僧）

入道二品親王―頼尊律師（池上平教阿闍梨入室）―寛意―隆眞―隆勝

―兼意（成蓮房）
―寛助―宗範
―済暹（南岳房律師）

淳祐―寛忠―平救
明算―良禅―眞譽―聖譽

（傳法灌頂相承略記・血脈類聚記による）

《真言宗小野流血脈》

仁海―成尊―範俊―厳覺―寛信―念範―興然―栄然
　　―明海―顕杲
　　―増俊（中納言阿―一）―顕厳―宗恵
　　―義範（遍智院僧都）―勝覺―兼俊

（傳法灌頂師資相承血脈による）

注

1、崎村弘文「九州大学所蔵儀軌類について」（『訓点語と訓点資料』第六二輯）には以下の二資料が掲げられている。

○大毘盧遮那成佛神變加持經巻第二　西墓点
（奥書）（朱書）天承二年八月廿日辰時移點了

○大毘盧遮那成佛神變加持經巻第下　東大寺点
（奥書）承安三年七月一日於勧修寺西山住院／書了　末資興然

2、当該資料は現蔵の資料で朱の第一群点と墨仮名の加点が存するらしい。加点されたヲコト点の形式から加点者は天台宗系の僧侶であると判断されるが、この青龍寺儀軌の書写もまた加点も「高野山安居之間」であって、純粋の天台宗系の訓読語資料ではな

いと判断される。当該資料の精査を待たねばならないが、訓読語自体は真言宗高野山系のものである可能性が非常に高い。

また、青蓮院吉水蔵には、青龍寺儀軌が今一点現蔵されているらしく、奥書がないものの、平安後期書写加点の資料で、東大寺点が用いられているようである。本資料は、真言宗小野流系の資料かと判断されるものであって、吉水蔵の状況も、右の本論を裏付けるものである。

3、このような状況にある資料として他に金剛界儀軌が存する。これについては、以下の拙稿に論じたことがある。

拙稿「平安時代における金剛頂蓮華部心念誦儀軌の訓読について」（『小林芳規博士退官記念国語学論集』（汲古書院）、平成四年三月）

拙稿「天台宗寺門派における金剛界儀軌の訓読について」（『継承と展開1　古代語の構造と展開』（和泉書院）、平成四年六月）

拙稿「真言宗小野流における金剛界儀軌の訓読」（『国文学攷』第132・133合併号、平成四年三月）

4、拙稿「真言宗小野流における金剛界儀軌の訓読」（『国文学攷』第132・133合併号、平成四年三月）において、その一端を明かにした。

［付記］本稿は、訓点語学会第七十回研究発表会において口頭発表したものをもとに成稿したものである。席上、御教示戴いた築島裕・遠藤好英・石塚晴通各先生に深謝申し上げる。又、資料の御提供を戴いた築島裕・石塚晴通両先生はじめ本稿引用の諸資料の御所蔵の御当局各位に尽心の謝意を表する次第である。

（まつもと　みつたか、高知大学助教授）

（平成六年七月十五日受理）